

# 学校支援実践研修会

期 日 平成29年12月14日（木）

会 場 鏡石町図書館

主 催 福島県教育委員会

参加者 56名（コーディネーター等23名、幼・小・中職員15名、  
市町村職員8名、発表者5名、事務局5名）

## 実践発表Ⅰ

### 「湊地区学校支援地域本部の取組について」

発表者 湊地区学校支援地域本部

コーディネーター 横倉長政氏・横倉英子氏

① 会津若松市湊地区、湊小学校、湊中学校の概要

② 湊地区学校支援地域本部の設置

- 平成28年度手探りの状態でスタート
- 湊地区地域活性化協議会に協力要請
- ボランティア募集チラシを回覧、10名程度しか集まらなかった（現在30名に）
  - ・ 読み聞かせ、教育環境整備、体育競技指導補助、授業補助、学校行事支援、登下校時における安全確保、その他
- 次第に地域の学校に対する理解が深まってきた、身近になってきた
- 公民館だよりの反響が大きかった

③ 平成28年度の具体的支援

- 芋煮会（学校行事）での器材・食材運搬、かまどの世話
  - ・ 教師から「余裕が生まれ一人一人に目が届くようになった」との評価
- 野菜づくり（小学3年総合）の支援
  - ・ 農作業ボランティアの打診（「ほろむいイチゴ四季の」）
  - ・ ヤーコン収穫での子どもたちの笑顔を通し、ボランティアのやりがいに気付く
- 春休みこども学習会の運営
  - ・ 地元の高校生・大学生を講師に依頼
  - ・ 先輩とのふれあいもねらった
  - ・ 保護者からも継続の希望をいただいている
- 総合的な学習の時間の支援が中心、農作業に関する支援が多かった



- 徐々に支援活動が増えていった
- 11月から「図書整理」の支援も始まった



#### ④ 学校も地域へ貢献

- 敬老会や「湊もち・そばまつり」で中学生がEXILE直伝のダンスを披露
- 「サギソウ展」に小・中学生も出品

#### ⑤ 平成28年度を振り返って

- 地域住民の変化  
…湊町全体の事業として受け止めていただいた
- 学校側の門戸開放  
…理解が深まり、打合せが定例化した
- ボランティアの定例化 …毎月16日をボランティアの日に（図書ボランティア）
- ボランティアの意識改革 …負担ではなく「やりがい」に

#### ⑥ 平成29年度の活動

- 湊小学校の教育課程に支援事業が組み込まれた
- 年度当初の計画から大幅に支援依頼が増えていった
- こども学習会は夏休みにも開催されるようになった
- 郷土料理「豆腐もち」づくりなど郷土学習も増えていった
- 湊中学校でも環境整備支援や学校行事支援を行った



#### ⑦ 平成29年度の現状（まとめ）

- 社会貢献の喜び…自主的・主体的に「地域が学校を支援する」という目的の浸透
- 教育課程に位置付け…学校側が頼りにし、パートナーに
- 中学校での事業拡大…体験活動を主に更に広げていきたい
- 先輩と後輩の絆づくり…高校生や大学生と触れ合う機会、将来の自己実現に
- 目指す姿…地域全体で先生方と学校を応援し支える雰囲気を作る  
先生方が、余裕を持って子どもたちに向き合えるように  
ボランティアも社会に貢献できる喜びにつながっていく

### 【質疑応答】

Q：毎月16日をボランティアの日に設定した理由は？

A：特に理由はない。月の真ん中ということ。

Q：平成30年度の予定は？

A：中学校支援を更に充実させたい。体験学習や職業学習などもっと関わっていきたい。

Q：高校生ボランティアはどのように確保したか？

A：コーディネーターが湊中学校サポートティーチャーをしている関係で高校生には声をかけやすい。

Q：学習会ボランティアの謝金はどのようになっているか？また、講師はどのようにして探しているか？

A：学校支援活動事業からは謝金は出せない。公民館事業と抱き合わせにし、公民館報償費からわずかであるが図書カードをお渡ししている。高校生に声をかけると友達にも声をかけてくれ集めてくれている。

Q：図書ボランティアではどのような活動をしているのか？本市ではどうしても図書整理になってしまう。

A：先生方も頼りにしていて、連絡ノートに支援してほしい内容が書いてある。



# 実践発表Ⅱ

## 「桑折町の学校支援地域本部事業について」

発表者 桑折町体験活動・ボランティア活動支援センター  
コーディネーター 荒 哲也氏

### ① 桑折町体験活動・ボランティア活動支援センターの活動

- 学校支援…要請に応じたサポーターの派遣
- 14の「こおり地域クラブ」を設置…月1～2回の開催
- 体験チャレンジ…子どもたちが普段できないような体験活動を提供

### ② 学校支援地域本部について

- 平成20年度に設置
- 町内の4小学校・1中学校、幼稚園、児童館、各地区学童預かり施設で支援



### ③ 支援体制について

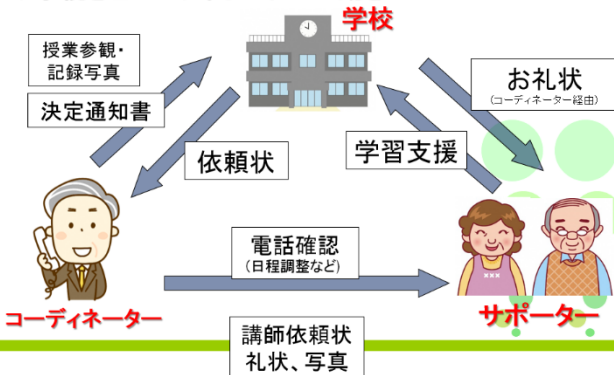
- 「桑折町人材協力支援バンク」搭載名簿の活用
  - ・ 105名、14団体の登録、分野別に名簿搭載している
- 学校の要請によっては、町外（福島市や伊達市）の方に依頼をすることもある
- 読み聞かせ「ファミリー文庫」、年間計画で小学校、幼稚園で活動

### ④ 運営について

- 手続き（コーディネーターの動き）
  - ・ 学校から依頼状（年間計画の提出、120～140件）
  - ・ サポーターへ電話連絡、日程調整
  - ・ 活動支援後サポーターへ礼状・写真を（できるだけ訪問し手渡しを心がけている）
- 連絡調整と人材確保
  - ・ 町内で都合できない場合には町外へも依頼
- 支援活動後サポーターから反省と聴き取り
- 支援センター事業関係者合同会議
  - ・ 年2回開催し、意見や反省を次年度の運営に生かす

### 運営について

#### ◆手続きとコーディネーターの動き



### ⑤ 広報活動

- 「支援センターだより」モノクロ版年10回、カラー版年2回発行
  - ・ 事実だけでなく、詳しい活動内容を伝える
- 地区公民館、駅構内に掲示（活動の紹介写真、学校支援の取組など）

### ⑥ 具体的な支援活動例

- 総合学習（小3）「昔遊び」サポーター6～10名
- 講演支援（保護者対象）「歯の健康」
  - ・ サポーター（歯科大学講師）を講師に
  - ・ 支援センターから学校へ要請
- 手話の授業（小5）サポーター2名

- 社会科（小3）「半田銀山見学」
  - ・ 郷土史専門サポーターが事前指導、事後指導にも入っている
- 総合学習（小3～5）「半田祇園囃子」サポーター4名
  - ・ 文化祭等で披露、発表要請が多く来るようになっている
- 家庭科（小5）サポーター2名
  - ・ ミシン指導補助、担任は大変助かっている
- 「桑折学習塾」への協力・支援（教育委員会からの要請による支援）
  - ・ サポーター（教職経験者3名、大学生・大学院生7名）をコーディネーターが発掘
  - ・ 小学校8回（国語・算数） 参加児童100名
  - ・ 中学校毎月2回（数学・英語） 参加登録者約100名
  - ・ 平成29年度からは行政が大学にはたらきかけ福島大学と協定を結ぶ
  - ・ 教育課程にはないような高度な学習内容も取り入れている



### ⑦ 心がけていること

- 研修会や他市町村との情報交換を支援事業に生かしていく
- サポーターの方々への誠意ある丁寧な対応を心がけている
  - ・ 直接訪問して依頼、お礼状の手渡し等
- サポーターの負担を最小限にするために事前打合せを効率的に実施
- 学校との連携を密にする（窓口は教頭先生）
- サポーターの確保のため老人クラブなどの組織を活用、常にアンテナを高く

### ⑧ 今後の課題

- 学校のニーズに応えるための支援体制の整備
  - ・ 要請に応えることはもちろん、提案等もしていく
- 新たな人材の確保、他市町村との人材交流
- サポーターのスキルアップ
- 持続させるために
  - ・ 無理はせずできることを続けていく
  - ・ 人が変わっても、誰でもできる体制づくり



### 【質疑応答】

Q：サポーターの入れ替えはどのように行っているのか？

A：桑折町の人材バンクが元になっており、2年に1度更新している。（辞退の申し出がなければ継続）

Q：勤務対応はどのようになっているか？

A：基本的に週3日勤務。行事等がある場合には変更、追加することもある。

Q：郡山市の人材バンクの場合は、4,500円/時の謝金が発生するが？

A：一般の学習支援に関する謝金はない。個人的にはゼロではどうかと思っている。



## ① 実践発表等に対する追加質疑

Q：桑折町は設立から10年経っているが、設立当時の目標は？

A：今の目標と同じである。

Q：サポーターを集めるための工夫は？

A：学校支援だけの団体では難しい。様々な団体の横のつながりが大切である。

Q：人材バンクの作成をどのように行っているのか？

A：公民館の持っているデータ（様々な団体）をベースにしたのではないかと？地域の人材を活用するという観点からも、PTAや老人クラブなども活用できる。あらゆる団体に視線を向けて人材発掘に繋げていく。ネットワークづくりが大切である。

Q：全県的なネットワークづくりのためにも、県教育庁のHPに悩みなどを書き込みすることはできないか？

## ② 人材の育成・発掘について

○ 玉川村では、県立図書館移動図書館が来館した時に、修繕の研修を行い、図書ボランティアの方以外にも参加してもらった。また、県中教育事務所の読書研修会に参加したり、定期的に読み聞かせの勉強会を開くなど人材発掘にも努めている。

○ 湊町では当初10名の登録であったが、人が人を誘い30名まで増えている。現在は65歳前後の方の登録が多い。親世代は保護者として直接学校に関わっている。お願いできることは何でもお願いするようにしている。学校に対して協力しなければならないと思っている人の多い地域である。

## ③ ボランティアについて

○ 自分の子どもにボランティアをするように親として仕向けてきた。参加できるボランティアがあれば参加したいと思っている子どもたちもいるのではないかと？

○ 須賀川市では、ジュニアボランティア活動を公民館で行っている。しかし、中学生で終わってしまっている現状である。

○ 本校の卒業生は、高校生になり今年もジュニアボランティアに参加したいと希望し参加した。次年度も参加する意向である。

○ 学校支援のボランティアというと「専門的な知識が必要」というイメージを持ってしまう。地域の高齢者や中・高生も是非学校で活用してほしい。

○ 学校にボランティアが入ると忙しくなるというイメージがある。多忙化が叫ばれる中、これ以上先生方（特に教頭先生）に仕事をさせてはいけない。学校を公民館のように使っていくてはどうか。学校の管理は、校長・教頭ではなく地域で管理する。そうすることで敷居も低くなるのではないかと。

○ 郡山での高校生ボランティアは私立高校生が多い。

○ 桃見台公民館には、毎年多くのあさか開成高校生がボランティアに参加している。

○ 学校支援活動事業のねらいの一つに教職員の多忙化解消がある。湊町の発表にあったように活用することで先生方が子どもと向き合う時間を確保できるメリットもある。今後啓発と支援を継続し、事業の理解、浸透を図っていききたい。



## 参加者の感想

「横倉ご夫妻のコーディネーターとしての取り組みに感動しました。」

「地域をいかす学校づくり、授業づくりの具体的な取組を教えていただいた。学校での打合せ(定例会)を継続的・計画的に行うことが大切と分かった。“先生方が余裕を持って子どもに向き合うよう支援”したいという声がありがたいと思った。」

「学校との打合せが定例化しており、学校とコーディネーターとが密になっているところが素晴らしい。」

「教育課程への位置付け、ボランティアの日の設定、ボランティアと担当教諭との連絡ノートなど大変参考になった。」

「高校生、大学生の活用、私も考えていく必要があると感じた。」

「学校支援の魅力的な活動例がとても参考になった。地域の“ひと”を活用し、支援いただくことによって学習も豊かなものになると思った。打合会を大切にしたいと思います。学校側もボランティアに甘えず、礼を忘れず、子どものために地域をいかした学習を展開したい。」

「学校のニーズに応じた多様な支援内容が設定しており、コーディネーターの関わりが素晴らしい。」

「荒先生の人格、人柄で地域を巻き込んだ学校支援になっている。是非参考にしながら地区の地域本部を活性化したい。」

「人材バンクの登録者の多さ、うらやましい限りです。」

「他市町のボランティアを活用できること、うらやましいと思いました。」

「教職員多忙化解消と連動させて考えていきたい。」

「多忙化解消の目的、高校生のボランティア、コーディネーター等新しい視点がいただけた。」

「学校として地域の協力を得るアイデア、きっかけづくり、ヒントを大いにいただくことができました。ありがとうございました。」

「コーディネーターの方の重要性を再認識させられました。ありがとうございました。」